

雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

競争と美意識

(運動競技を中心に)

ここで言う競争には憎しみによる敵対的行動、暴力行為、脅威行動は含まない。機械や動物との競争も含まない。人間同士の競争に限る。競馬は馬同士の競走に見えるが、騎手の間の競争と考えることにする。競争とは競い合うことだが、競い合いが瞭然な行動はもちろん、間接的であったり、目に見えなかったり、無意識であったりするものも含まれる。非常に多岐に亘り、何が競争か、競争でないかの境界線は引きにくい。

競争には相手があり、双方に競争心がなければならない。潜在的でもよい。相手に競争心がない場合は競争とは考えない。競争の結果、勝敗、優劣、序列が決まる。大まかに例示すれば、運動競技、頭脳競技、技能競技、事業活動、選挙、各種試験、娯楽競戯、ある種の生活行動などがある。人生が競争だという人もいる。競争には一対一、一対複数、複数対複数の場合がある。

競争心は生きる本能が引き起こすもので、全ての生物にある。本当に競争心がないなら、生き物ではない。「私は競争心がない」などと言う人がいるが、その人は本当は競争心があるのに、言動に表れないだけである。鳥獣などの子育てを見れば、子らの競争心が旺盛なのは瞭然で、人間の幼児も変わらない。成長後も競争心が消えることはない。安売り広告を見て、先を争って買い求めるのは日常のこと、行列は競争による混乱を避けるための知恵に過ぎない。

競争心や競争相手という、恐れを感じる人がいるかも知れない。競争は嫌いだという人もいる。これは競争心の有り無しとは別のことで、気持ちは一応理解できる。多くの人が競争なく仲良く生きていくことができれば、それに越したことはない。しかし、現実には競争を避けては、誰も生きることができない。

以下、主として運動競技について述べる。

競技の場合は競技規則に沿い、大抵審判員の判定によって決まる。学校の運動会などでは、規則が明文化されていなくても常識でこと足りる場合が多い。遊戯の場合も決まりがあり、参加者は決まりを理解して競い合う。

ライバルという言葉がある。競争相手という意味である。喧嘩相手を指していることもあるようだが、良い意味での競争相手と考える方がよい。自分にとって励みになる相手を指すのが良い意味になる。好敵手という言葉が当たるだろう。そこには相手に対する尊敬の念が込められている。老若男女を問わず、ライバル意識を持つことは望ましい。高齢者は若い者に負けない気を失わず、若い人は年長者を越える気概を欲しい。

競争には美意識が伴う。競争の美意識は、競争当事者一方だけの美意識ではなく、双方の美意識と周辺の人々の美意識の総合となる。競争の美意識は勝者が美、敗者が醜とは限らない。勝者側も勝ち方が汚かったと思えば醜、敗者側は最善を尽くして勝者を称えるならば美となり得る。双方とも美、双方とも醜となる場合もある。競争が長い場合には、競争の部分的な評価もできる。意識は個人の主観であるから、個人ごとに異なってよい。

競技の場合の美意識は、競争当事者の他に審判員、監督、指導者、評論家、応援者、観衆にもあるが、

それぞれの立場で異なってよい。

競争の美意識は、部分的な美意識の積み重ねになることがある。競争の個々の場面の美醜を総合して、“一つの競争”としての美意識となる。野球は9人を単位とする団体競技だが、投手対打者、打者対野手などの、1対1の勝負の連続と見ることもできる。攻撃側の打席待ちの選手は一時的に観衆と似た立場になる。個々の勝負には色々な立場による美醜があり、一つの試合としての美醜はその総合になる。

相撲の勝敗は解り易い。規則で認められている手であれば、どんな手で勝っても勝ちだが、観衆の美意識は力士の地位（番付）や技に関係するようである。横綱が横綱らしい勝ち方をすれば美、横綱らしくない手で勝てば醜とされる傾向がある。負けた側も精一杯力を出し切り「いい相撲」になれば称賛される。これは観客の拍手の仕方でも知ることができる。美しい競技は正々堂々、精一杯、持てる力を遺憾なく発揮し、最善を尽くすことから生まれる。勝ちが美、負けが醜とは限らない。美意識は時の経過で変わることがある。

運動競技では、選手や関係者の不正行為が長年に亘り問題になっている。主な例は禁止薬物を用いて体力の強化を図るもので、国際競技では跡を絶たない。動機は個人的な場合もあり、集団、組織的な場合もある。勝負の後に判明するもので、美意識は一変する。勝てば富や名誉につながることを幻想した悲しむべき行為である。近年発覚した幾つかの例を挙げる。当時の報道やWebの情報による。

- ・数年前、多数のロシア選手が禁止薬物を用いたことが発覚した。しかも国家による組織的なものとされ、2016年リオデジャネイロ五輪では多数のロシア選手が出場禁止処分を食らった。

- ・2017年には日本の拳闘選手Mの国際試合が行われ、国内外の大方の目がM優勢と見ていたにもかかわらず、Mの判定負けとなった。世界ボクシング協会（WBA）は審判員の判定が公正でなかったとの疑惑を抱き、後日再試合を行うこととなり、その結果Mが勝った。

- ・2018年には日本のボクシング連盟の幹部役員Yが、国内試合での勝敗について、特定地域の選手を勝たせるよう審判員に影響力を及ぼすという不正がなされた。

- ・2018年には東京五輪を目指していた日本のカヌーの選手Sが、競争相手の飲み物に禁止薬物を混入させ、陥れようとする事件が起きた。

- ・2018年には大学対抗の球技（アメリカンフットボール）で、監督などの指導者が配下の選手に、試合中に対戦相手の選手を怪我させる指示を出したとする事件が発生した。指示を受けた選手は実行した。これに至っては、もはやスポーツではない。

競技というからには、勝つに越したことはないが、勝ちにこだわり過ぎるのはなぜか。商業主義的な感覚が異常に昂じた結果ではないか。名誉や富に目がくらんで、規則違反をしてでも勝ちにこだわるのは醜の最たるものである。

- ・2019年には、上例とは質が違うが、競馬界にも薬物問題が起きた。競走馬の餌に禁止薬物が混ざっていたことが判明し、150頭余りが出走できなくなった。

また、選手が勝つことへの世間の期待に重圧を感じ、堪え難い苦境に陥り、自殺に至った例がある。だいぶ以前だが、前回の東京五輪でマラソンに出場し、奮闘して3着になったTは、その後も優勝への世間の期待が続き、Tは期待に応えようと努力したが耐えきれず、自殺した。最善を尽くして負けたとしても、恥じることはないと思うのだが…。このように、競技の場から離れたところでの残念な出来事も多い。大相撲力士の土俵外での暴行事件も問題になった。このほか組織運営、いやがらせなど不祥事は多数ある。上例はごく一部に過ぎない。

2020年には東京を中心に国際的な大きな運動競技会が催される。出場選手全員が正々堂々、最善を尽くし、美しい競技を演じて頂きたい。